

氏 名 王 世禎

学 位 の 種 類 博士 (文学)

学 位 授 与 年 月 日 2023年3月31日

学 位 論 文 名 宋代的交流空間：以茶館和茶文化為線索

論文審査委員 主査 渡辺 健哉

副査 平田 茂樹

副査 松浦 恆雄

副査 (外部委員) 広州大学人文学院 副教授 楊恒平

論文内容の要旨

本論文は、主に唐宋時代から発展してきた茶館、士人間の贈茶文化や茶会を切り口として、茶を媒介として構築される宋代交流空間の展開と特徴を明らかにしたものである。以下は本論文の概要である。

序章「宋代以茶為媒介的交流空間研究現狀與課題」(宋代の茶を媒介とする交流空間研究の現狀と課題)では主に交流空間を手がかりに宋代の茶館および茶文化についての学術史の整理を行い、課題を提示した。研究対象とする茶館、贈茶文化、茶会に関する研究を以下のように整理した。茶館については、茶館の歴史と発展、経営内容と類型を研究する基礎的研究、茶館の社会機能を解明する研究、茶館自体の性質(あるいは茶館という空間)の研究に分類される。茶に対する研究範囲は広く、茶の栽培、茶葉経済に関する研究以外、茶文化の研究は以下の方面に集中している。1、飲茶の風習、流行した茶の種類、飲茶法、茶芸、茶具などの発展と変化に関する基礎的研究。2、政治生活や社会生活における茶の役割と機能に関する研究。3、茶によって生まれた様々な文化現象(茶書、茶に関する文芸作品、士人間の贈茶など)に関する研究。4、茶の精神文化を探る研究。この内、宋代の贈茶文化に関する研究は主に贈茶文化と文人趣味との密接な関係性や、士人の交遊において茶の果たした作用に関して検討されている。茶会に関する研究については茶会の歴史と類型を中心に進められてきた。

以上の茶館、贈茶文化、茶会の研究を踏まえると、いくつかの問題点と課題を提出することができる。1、茶館、贈茶文化、茶会の研究に共通する問題点。①茶を媒介とする交流の意義がまだまだ十分に研究されていない。②史料の探索が不足している。2、宋代茶館研究の問題点。①多くの研究では両宋間における茶館の変容過程や、地域間

の差異（首都一地方）の問題を看過している。②都市空間における茶館の分布形態が十分に検討されていない。③宋代茶館の経営者と利用者の問題について深く研究されていない。3、贈茶文化と茶会研究の問題点。①書簡とともに送られた茶についての議論が不足している。②多数の研究は茶会の歴史と類型にとどまっており、茶会を開催する場所や時期、茶会での具体的な交流内容、茶会の参加者の身分などについて深く研究されていない。③宋代士人の日常生活において頻繁に行われた「会茶」をおろそかにしている。

以上の問題に対して本論文は以下の方面から考察する。1、交流空間の視角から茶館、贈茶文化、茶会を分析し、茶を交流の媒介として構築される交流空間の形態と特徴を解明する。2、データベースをもとに傾向性や特徴を明らかにする計量史学の研究方法を参考にして、関連史料を収集して全面的な整理と分析を行う。3、茶館と都市空間の関連性と相互作用に注目し、茶館研究と都市研究を結合し、茶館の都市空間における具体的な分布を明らかにするとともに、その分布に見られる特徴と両者の影響を明らかにする。4、時期や地域間の差異に注目し、北宋と南宋、首都と地方の茶館について比較研究を行う。5、贈茶に関する問題について、主に『全宋文』から関連史料を収集整理し、士人間の贈茶の状況と特徴を分析する。6、茶会については、各種類の茶会を総括すると同時に、日常的な「会茶」の参加者、開催時期、交流内容などを分析し、官司や教育施設内に設置される会茶空間の形態と特徴を探る。

第一章「北宋開封的茶館」（北宋開封の茶館）では都市史料と筆記小説史料を利用して茶館の関連史料を収集し、史料中の時間、登場人物、機能などをまとめたデータベースを作成した。このデータベースに基づいて具体的な関連史料を併せて北宋開封における茶館に対する分析を行った。北宋開封の茶館は前代より経営時間が長くなり、都市空間内に広く分布するようになっていく。北宋開封の茶館は飲食・宿泊・労働斡旋・牙行（問屋業）などの機能を兼ねており、一つの茶館が複数の機能を持っていた。開封の茶館は、東華門や土市子のような商業地区に集中して分布される以外、最も注目される分布場所は汴河沿岸であり、商業と交通物流がその分布に大きな影響を与えていることを明らかにした。都市空間における茶館は酒樓・食店（飲食店）・妓館・瓦子（巨大な歓楽街）・邸店（旅館）・寺院・道観などの分布と関連付けて広がっていた。

第二章「南宋臨安的茶館」（南宋臨安の茶館）では前章と同様の研究方法を用いて南宋臨安の茶館を分析した。都市史料を分析したところ、南宋臨安の茶館では娯楽機能が大きく発展し、明清時代に茶館と同様の形態で発展していることが明らかになった。同時に、筆記小説史料中の茶館の関連史料を分析したところ、南宋臨安の茶館の機能は、邸店・牙行・瓦子・酒樓・食店などの施設の機能とも重なるところがあり、北宋開封の茶館の機能のある程度継承したといえる。このほか、都市空間における茶館の分布と特徴などの問題を検討することにより、従来の研究に指摘される商業地区・城門周辺・坊巷・名勝のほか、運河や銭塘江などの交通の要衝・瓦子・軍營・寺院・西湖周辺などの地区にも点在していることが明らかになった。以上の分析によって、南宋臨安の茶館は北宋以来の多機能性を継承しながら、娯楽に特化していくことを明らかにし、茶館が臨安城内から城外に広がっていく傾向も確認した。このように、茶館は社会生活の中で多種多様な役割を果たし、都市空間における交流空間の構築と広がりにおいて重要な役割を果たした。

第三章「從宋代士人的書信與贈答詩看贈茶文化」（宋代士人の書簡及び贈答詩より見る贈茶文化）では主に宋代の士人が記した書簡と贈答詩を中心に、そこに窺える宋代茶文化の特徴を検討し、宋代士人間において盛んに行われた贈茶文化と宋代社会の文化面での発展の様子を解明した。本章では宋代の茶詩を整理して分析するとともに、書簡史料に検討を加えた。贈答品における茶の占める割合について数量的な分析を行い、受領者の人物・身分・時

期・贈茶の種類・場所および交遊の種類などに関して表とグラフを作成した。贈茶に関する事例を分析することで、両宋時代の贈茶の種類、贈茶の場面、贈茶の対象の傾向について明らかにした。また、贈茶の品目に対する分析から、高級品から通常品へと変化する傾向を明らかにした。以上の分析により、両宋の茶文化の特徴やその変遷を示すとともに、士人の生活と交遊において媒介機能を果たした茶の役割が明らかとなった。

第四章「從茶會和會茶看宋代士人的交流空間」（茶会と会茶から見る宋代士人間の交流空間）では茶を媒介とする宋代士人間の日常的な「交流」面に踏み込んで分析を行い、士人の日常交流に重要な役割を果たす茶会と会茶について検討した。「茶会」、「会茶」、「鬪茶」について、筆記史料を主たる史料として利用しながら、書簡や地方志などの史料と突き合わせて詳しい分析を行った。茶会は一般的には皇帝と官僚の間、同学・同僚の間、友人の間、士人と僧侶の間で行われ、士人ネットワークを形成する中間環節の一つとして重要な役割を果たした。茶会には皇族が行う儀礼的性格の強い茶会、宗教的交流としての茶会、節日等で行う茶会、士人間で行われた雅集の茶会等がある。一方で会茶は集まって飲茶するという行為であり、同学・同僚の間で行われた恒例の会茶や、友人同士の日常的な会茶が存在した。また、士人が一堂に会して茶の優劣を評価する鬪茶も行われた。以上の分析によって、茶を媒介とする宋代士人の文化生活や、士人間の交流で果たした役割が明らかとなった。

終章では本論文の総括を行った。宋代の交流空間とその特徴について更に説明し、その上で残されている課題を展望した。本論の茶館、贈茶文化、茶会と会茶に対する分析と考察によると、都市空間の中の茶館は実際に存在する物理的な空間であるとともに、交流空間も提供している。茶館に集まった人々は様々な情報を入手して、そこから都市空間の内外に情報を広めた。この過程で茶館は交流空間の一部となった。本論文の第一章、第二章で述べたように、茶館の利用者（科挙の受験者、地方官、外地の客商など）は、休憩や娯楽の空間として利用するだけでなく、茶館で情報を得ることも期待した。彼らの活動によって首都と地方の情報伝播が実現していた可能性が高い。もちろん交流空間は茶館のような物理的空間内に形成されるだけでなく、各種の人的な活動を介しても形成される。第三章、第四章では贈茶と茶会など一連の茶を媒介とする交流活動を考察した。宋代士人は贈茶と書簡、茶会などを介して交流していた。この両者は、物理的空間ではなく、交流を達成するための重要な交流空間となった。本論文において交流空間という視角から茶を媒介とした士人交流を検討したことは、士人ネットワーク研究に新たな視点を加える可能性を有している。

今後この交流空間をより深く掘り下げるためには、以下の方向が考えられる。まず、書簡史料の収集と分析を継続する。また、都市における茶館以外の物理空間での情報交流を検討することも方向性の一つである。例えば、都市内の祠廟・道観の建設は朝廷と地方、官府と民間の民間信仰に対する交流を体現している。また、日記や旅行記などの史料を用いて「跨域交流」（多地域交流）の研究を行うことも可能となる。

論文審査結果の要旨

本論文「宋代的交流空間：以茶館和茶文化為線索」（宋代の交流空間：茶館と茶文化を手掛かりに）は、唐宋時代から発展してきた茶館、宋代の士人間の贈茶文化や茶会といった茶と関連する様々な文化現象を切り口に、茶を媒介として構築される宋代交流空間の展開と特徴を明らかにした。以下、本論文が学界に対して果たす三点の学術的意義を説明していく。

(1) 「交流空間」という研究視角の提示。本論文では「交流空間」という視角から茶を媒介とした士人交流を

検討した。これは士人ネットワーク研究に新たな視点を加えたといえる。本論文は、地理学で提示された「空間」に関する考え方を援用し、物理的空間を指す space を意識しつつも、その space の中で展開するネットワークや情報、意識、認識、文化あるいは秩序などを表す place を意識し、「交流空間」を分析概念として用いた。これまでの宋代茶館ならびに茶文化の研究を俯瞰しても、「交流空間」という切り口で分析したものはおそらく皆無であり、全く新しい研究視角と位置付けることができる。唐宋変革という時代の画期を経て、社会構造の形成に大きく影響した情報の交流と伝播、人と人との関係の形成などの研究に新しい視角を提供した。

(2) 士人間の交流をめぐる新たな視角の提示。一般に宋代士人の交流を分析するにあたっては、「拜謁」「走訪」「宴飲」「雅集」「送別」等が注目されてきた。本論文で扱ったような「贈答品の応酬」といった行為はあまり着目されていない。本論文では、その方面で先駆的な業績といえる、合山究氏の研究を深化して、贈答品としての茶に注目し、贈答品の応酬を「交流」の重要なポイントとして分析した。この点は新たな研究視角の提示として大いに評価することができる。なお、現代の中国人の交流においても「贈答行為」は相互関係を確立する上で極めて重要な働きをしている。この点を踏まえれば、この「贈答行為」の分析は極めて現代的な問題とも関連づけることが可能になる。

(3) 宋代史料を網羅的に整理した上での分析。本論文では『全宋筆記』『全宋詩』『全宋文』という大規模なデータベースを利用して、大量の史料を整理して、論旨を練り上げていった。具体的にいうと、第一章・第二章については、都市史料・筆記史料・小説史料を用いて茶館史料を網羅的に収集し、その中から傾向性や特徴を浮き彫りにした。第三章・第四章については、贈茶詩と贈茶に関わる手紙等を網羅的に収集し、分析を行った。総じていえることは、データベースを用いた「計量分析」により、その特性や傾向性について説得力を持つ成果を得ることができた。なお、附言しておけば、茶文化について、これまで多くの研究者は「茶詩」に着目してきたが、本論文では贈茶に関する書簡を利用した。新たな史料の発掘という点で、その努力が評価される。

以上のように、本論文は「交流空間」という視点の下、茶を通して行われた宋代士人間の交流の具体的諸相を明らかにした。ただし、不十分な点もないわけではない。たとえば、データベースにもとづく「計量分析」により一定の成果を得たといえるが、惜しむらくはさらにもう一步踏み込み、一つ一つの史料の背後に潜む「文化」を明らかにする必要があるであろう。ただし、この点は本人も十分に認識しており、今後の研究によって解明されていくものであって、本論文の価値を損なうものではない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値すると認められる。